



写真-1 名畑の流れ橋（平成25年7月撮影）

■ コンクリート橋脚に改築以降、維持管理の苦勞が軽減

名畑の流れ橋の橋脚が、丸太で囲った枠に玉石を詰め込んだ形式（以下「木枠形式」）から、玉石張りのコンクリート橋脚に改築されて以降、橋桁が流されることはあっても、橋脚が流されたことは今までなかったそうです。従来の架け直し作業は、橋脚の復旧から始まることからほぼ1日仕事になっていましたが、橋脚が無事であればその復旧作業がなくなるので、3～4時間程度で終了します。

では、コンクリート橋脚になったのはいつ頃のことでしょうか。

名畑橋管理組合長の八木さんの話では、「はっきりとした記憶はないが、昭和40（1965）年頃にコンクリート製に改築され、昭和55（1980）年前後だったと思うが圃場整備に併せて河川改修をした際に橋脚が嵩上げされた」とのこと。

『一宮町史』によると、西播地方初の県営圃場整備が昭和46（1971）年度からスタート、全区域を三つのブロックに分け、染河内（そめごうち）、下神戸（しもかんべ）、上神戸（かみかんべ）の順に工事を進め、昭和54（1979）年度に完了しています。



写真-2 名畑橋遠望（名畑橋管理組合提供）

名畑集落がある須行名（すきょうめ）地区は下神戸に含まれ、当該地区の圃場整備は昭和49（1974）年度に実施されています。また、下神戸では、圃場整備に関連して、揖保川改修工事が昭和50（1975）年に着工しています。

以上のことから、流れ橋の橋脚が、玉石張りのコンクリートに改築されたのは昭和40（1965）年頃で、橋脚の嵩上げが行われたのが昭和50年代半ばと考えられます。

なお、現在のコンクリート橋脚天端は、堤防天端より 4.3m～4.6m 低い位置にあり、平常時の水面より約 2m 高い位置にあります。

■ 流された橋の架け直しは集落総出で

写真-3～14 は、平成 23 (2011) 年 10 月初旬に行われた流れ橋架け直しの状況を名畑橋管理組合の方が撮影されたものです。

従来の木枠形式の橋脚を復旧する場合は、どうしても川の中に入らざるを得ないのですが、コンクリート橋脚に改築されて以降、今のところ橋脚が流されたことはなく桁だけの復旧となっていて、水に浸からずに復旧できるように工夫されています。

復旧作業（架け直し）は、流量が平常時に戻った頃を見計らって、集落の人を集めて行われます。作業は、朝の 8 時頃から始められます。（以下は、第 1 スパン、第 2 スパンの架け直しの手順を説明したのですが、写真は該当作業が説明できるものを使用し、必ずしも第 1、第 2 スパンの作業風景とは限りません。）

- ① 第 1 スパン：堤防に最も近い第 1 スパンは、堤防の法尻部なので陸上作業が可能。丸太および橋板を約 15 人で担いで、低水護岸天端と第 1 橋脚の上に架ける。
- ② 第 2 スパン：第 1 スパン上に載せた 1 本目の丸太をスライドさせながら、第 2 橋脚の側面に突きつける。その際、3 人が丸太に跨って重しになる。丸太の下にはスムーズにスライドさせるため、「コロ」として鉄パイプを 2 本敷く。



写真-3 ① 第 1 スパンに桁を架ける



写真-4 ② 鉄パイプ2本の上に載せた1本目の丸太をスライドさせる

- ③ 第 2 橋脚に突きつけた 1 本目の丸太上を一人がロープを背負って渡る。第 1 スパン上にいる 3 人は丸太に跨り、重しとなって、突きつけた丸太の先端がずり落ちないようにする。
- ④ 第 2 橋脚に渡った人は、丸太を第 2 橋脚上に据え付ける。



写真-5 ③ 1 本目の丸太の架設・一人目が渡る



写真-6 ④ 1 本目の丸太を橋脚の上に設置する

- ⑤ 続いて、もう一人が第 2 橋脚に架けられた丸太を渡る。
- ⑥ 2 本目の丸太を 1 本目の丸太に載せ、第 1 スパンにいる人たちは、2 本目の丸太を押し出す。一方、第 2 橋脚上の二人は、2 本目の丸太に括り付けたロープを引っ張り、引き寄せた 2 本目の丸太を橋脚上に載せる。



写真-7 ㊦ 二人目が渡る



写真-8 ㊦ 1本目の丸太を利用して2本目の丸太を架設

㊦ ㊦ 次に、2本の丸太をガイドレールとして、その上に鉄パイプをコロとして2本並べ、その上に載せた橋板を第2橋脚までスライドさせる。第2橋脚上の2人は、橋板に括り付けたロープを引っ張りながら、スライドの方向がずれないようにする。



写真-9 ㊦ 第1スパン上をスライドさせながら橋板を架設



写真-10 ㊦ 2本の丸太を利用して橋板の架設

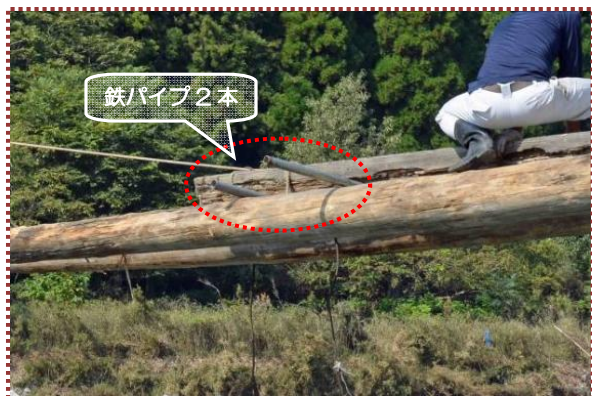


写真-11 鉄パイプ2本を敷いてコロにする



写真-12 護岸天端に打ち込まれたアンカーに繋がれたワイヤー

以下、同じような要領で第3スパン以降も架設していきます。そして、すべての作業が終わるのは12時頃。

架け直しが終わり、堤防に腰を降ろして、みんなで缶ビールを飲むのが至福の時だそうです。

ひょっとすると、これが、しんどい架け直し作業に伴う流れ橋が、利用頻度が少なくなった今でも維持されているほんこの理由なのかも。



写真-13 陸上作業にはご年配の方々も参加



写真-14 流れ橋かけ直しの状況

■ 河川法上の手続きについて

名畑の流れ橋に関する河川法（昭和39年7月10日法律第167号）上の手続きについて、宍粟市林業振興課にお聴きました。

手続きは、河川法第24条（土地の占用の許可）が該当し、宍粟市が河川管理者である国土交通省（姫路河川国道事務所 龍野出張所）に許可申請を行い、近畿地方整備局長から許可（5年更新）を得ているとのことでした。

占有者は宍粟市となっていますが、実質的な管理は名畑橋管理組合が行っています。組合員数は40名あまりで、40代の比較的若い方もいますが、平均すると60歳くらいだそうです。

なお、通常新たに橋を架ける場合、河川法第24条および26条（工作物の新築等の許可）が該当しますが、名畑の流れ橋は、河川法施行以前にすでに設置されていた施設であることから、河川法第87条（経過措置）の適用を受け、従前と同様の条件により工作物の設置について第26条の許可を受けたものとみなされています。

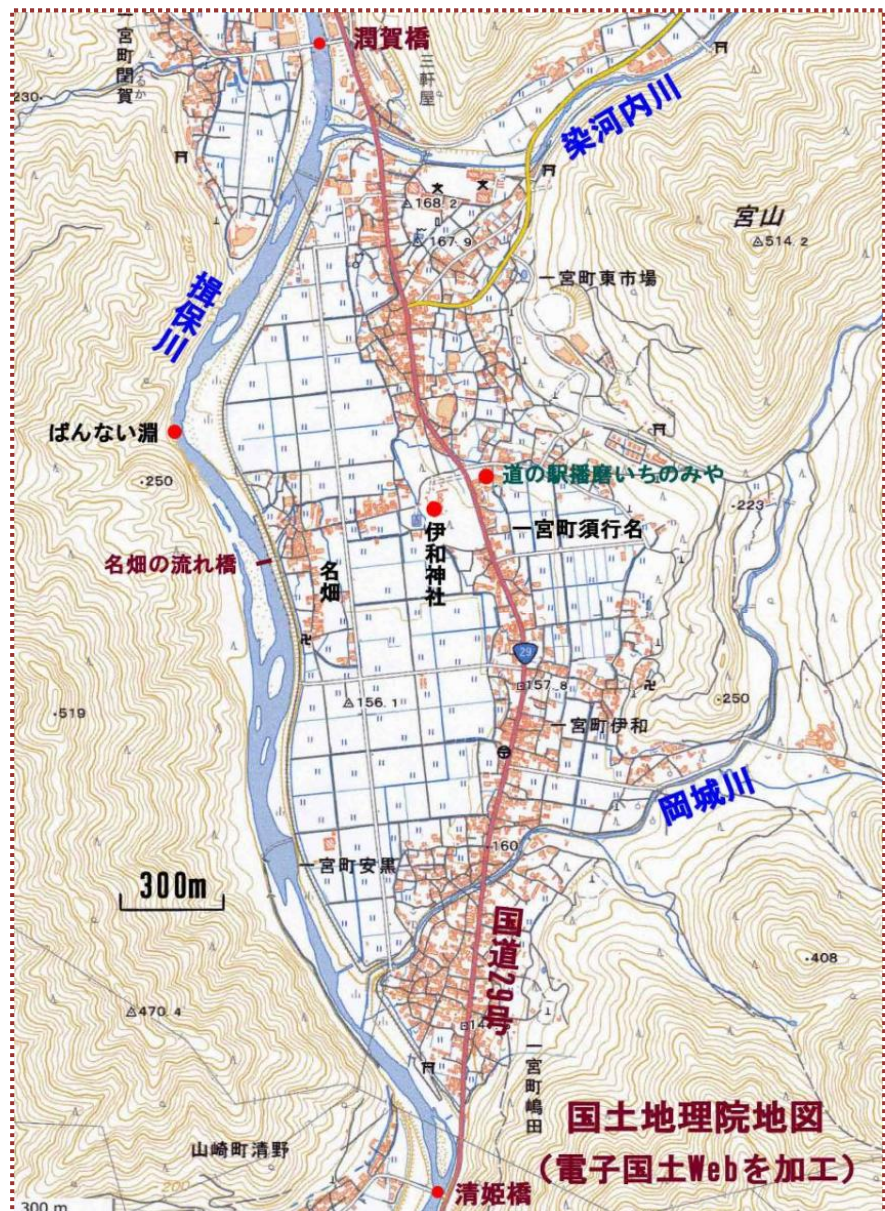


図-1 名畑集落周辺の地図

■ 堤防の裏法尻にお地藏様

流れ橋が架かっている箇所の堤防裏法尻にお地藏様が祀られています。
(写真-15)

おそらく、流れ橋付近で流れに落ちて犠牲になった子供の霊を祀ったものと思われます（八木さんもこれにまつわる水難事故の記憶がないので、かなり昔の出来事と思われます。）。

元々は、堤防の表小段にありましたが、河川改修時に現在の位置に移設されたそうです。



写真-15 お地藏様が祀られている祠

■ モノローグ

かつて多くの人が渡っていたこの橋も、今では名畑橋管理組合の方でも年に一度渡るかどうか、それくらい橋の利用頻度は低くなってきています。昭和 20（1945）年の大洪水（阿久根台風か？）により対岸の畑はほとんど流され、共有林の手入れも平成 17（2005）年頃を最後に行われなくなっているとか。維持管理の大変さを考えると、流れ橋を廃止する声が上がってもおかしくないのですが、なぜかそのような声は出てこないそうです。

架橋当時、財力も高度な技術もなかった名畑集落は、地域が必要とするものを地域で知恵を絞り、地域で資材を調達し汗をかいって守ってきた、自然の力に逆らわず、流されれば手繰り寄せて元に戻す、そんな先人の心を流れ橋を維持管理する作業を通して引き継いでいこう、という思いが、地域の人たちを動かしているのでしょうか。

平成 16（2004）年（台風が本土に 10 個も上陸した年）には 3 度も橋が落ちたそうですが、その都度集落総出で復旧させています。

名畑の流れ橋は、今や名畑集落のシンボル、守っていくのが地域の務めとの想いが心の底にどっしりと根を下ろしているのかも。

ネジバナ

ラン科ネジバナ属の小型の多年草。花が花茎の周りに螺旋状に並んで咲く「ねじれた花序」が和名の由来である。「モズリ」、「ネジレバナ」、「ネジリバナ」、「ねじり草（そう）」とも呼ばれる。右巻きと左巻きの両方があり、中には花序がねじれない個体や、途中でねじれ方が変わる個体もある。右巻きと左巻きの比率は大体 1 対 1 である。人の頭のつむじみたいなのか。ちなみに、日本人の場合、つむじの右巻き、左巻きの比率はほぼ半々とか。芝生のような環境を好み、6 月から 9 月頃に多数の小さな花を咲かせる。流れ橋近くの堤防法面に咲いていた。



写真-16 ねじれていないネジバナ
(家の近くに咲いていた)



写真-17 右巻きのネジバナ
(流れ橋近くの堤防法面に咲いていた)

【参考資料】

- 1 『流れ橋の土木民俗学的研究（修士論文）』 東京大学大学院工学系研究科・安藤達也 平成 23 年 3 月
- 2 『穴栗市再発見！夢しそう 2012 冬号 Vol.9』 穴栗市 平成 24 年 12 月
- 3 『一宮町史』 一宮町史編集委員会 編 昭和 60 年 3 月
- 4 『ネジバナ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 29（2017）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.75

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』 No.75